

イギリスにおけるP scales活用の課題

—Mapledown Schoolを例に—

出井南奈帆・浦崎源次

群馬大学教育実践研究 別刷

第33号 95～105頁 2016

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

イギリスにおけるP scales活用の課題

—Mapledown Schoolを例に—

出井 南奈帆¹⁾・浦崎 源次²⁾

1) 群馬県立太田高等特別支援学校

2) 群馬大学教育学部障害児教育講座

Issues of using the P scales in England

—Case in Mapledown School—

Nanaho DEI¹⁾, Genji URASAKI²⁾

1) Ota Prefectural Senior Special School

2) Department of Education for Children with Disabilities, Faculty of Education, Guma University

キーワード：P scales、特別な教育的ニーズ、イギリス、ナショナルカリキュラム

Keywords：P scales, special educational needs, England, National Curriculum

(2015年10月30日受理)

1. はじめに

我が国においては全国一律の小学校と中学校の学習指導要領があり、知的障害以外の障害児を対象とする特別支援学校の教科については、それが適用されることになっている。知的障害児を対象とする場合は、教科名はほぼ同じだが異なる教科内容が設定されている。しかし、知的障害特別支援学校の教科と通常の学校の教科との関係や連続性は曖昧であり、どちらかという別の教科が設定されている感がある。

イギリスでは1988年教育改革法によって義務教育段階における全国規模の統一カリキュラムであるナショナルカリキュラム(National Curriculum(以下NCとする))が導入された¹⁾。NCはレベル1から8までの到達目標が設定されているが、知的障害児などNCの適用が困難な場合がある。このような子どもたちに適用される到達目標としてPerformance scales、通称P scalesが開発された。P scalesは、通常の学校における

教科と知的障害児等の学習を連続してとらえるものであり、P scalesをNCのレベル1につなげることによって、重度の知的障害を有する子どもたちも含め、全ての子どもたちがNCに参加する仕組みができたのである。このような到達目標の連続によって知的障害児のインクルージョン議論が可能となる。

知的障害児を含めたインクルージョン教育を模索する際には、教科の連続性を避けて通ることはできない。このような観点でP scalesに着目したが、P scalesは、我が国においては、まだ十分に紹介されていない。筆者の一人の出井は、イギリスの特別支援学校であるMapledown Schoolにおいて、延べ9ヶ月、3回にわたりボランティアとして授業に参加し、P scalesの活用状況を見てきた。本稿は、P scalesに関する文献、Mapledown Schoolの資料、出井のノートをもとにP scalesの意義と活用状況を紹介し、その問題点について考察する。

2. P scalesの開発と変遷

NCは、1-11学年をキーステージ1（1-2学年）、2（3-6学年）、3（7-9学年）、4（10-11学年）に分割し、それぞれのステージで教えられるべき教科とそこで求められる知識、技能、理解、達成すべき目標、到達目標を測定する方法を示している。それぞれのキーステージの最終学年では全国的な評価が実施され、第6学年と第11学年では全国共通のテストが実施される。それぞれの学年で期待されるNCのレベルは第2学年でレベル2、第6学年でレベル4、第9学年でレベル5である。

NCの目的は「個々の生徒が、その社会的背景、性別、文化、人種、能力や障害にかかわらず、多くの学習領域に参加して、社会の責任ある成員として自己実現し発達するのに必要な知識、理解、技能、正しい態度を獲得できるようにすること」²⁾であり、インクルージョンを強調している。NCの導入によって障害の有無に関わらず、全ての子どもたちが一つの共通するカリキュラムを履修することになり、どの子どもでも同じシステムの一員として扱われるようになったのである。そのために、子どもたちの多様性に対応するための、生徒のニーズに沿ってカリキュラムを開発するというかなりの柔軟性を校長に与えている。しかし、NCは、日常生活の活動や自立といったものは扱わず、教科に集中しているため、特に重度重複障害を有する子どもたちにとっては、履修することが難しいものとなっている。NCではかれらの学習や到達度を最大限にできない場合、校長はNCの一部あるいは全てを適用しないという判断ができる。

NCは、法律上は全ての子どもたちが対象となっているが、実際には一部の特別な教育的ニーズのある子どもたちが履修することは困難であり、かれらはNCの対象外となってしまう。このようなNCの対象外となった子どもたちをNCの対象としてとらえるためにP scales（ピー・スケールズ）が考案された。

P scalesの導入以前もこれらの子どもたちの評価は行われていた。NCのレベル1未満の内容を学習する子どもたちの評価は、NCのレベル1に向けて学習しているという意味のWorking towards level 1の頭文字をとって“W”と一様に評価され、どれくらいのレベルにあるのか、どのくらいでNCに到達することができるの

かといった個々の評価はなされなかった。さらに、NCの内容を学習しているにもかかわらず、キーステージの終わりに受けるテストや課題が不適切だと判断された子どもたちはDisappliedの頭文字を取って“D”と評価された。“W”や“D”と評価された子どもたちは法的に定められた評価の対象外とされた。このようにして多くの子どもたちの記録が失われたのである。

これを重くみた特別支援学校の校長たちは、1990年代中頃、特別な教育的ニーズ（以下SEN）を有する子どもや、NCが適切でないと思われる子どもたちの到達度や成長をはかるための適切な基準を開発するために集まった。教育科学省（当時）は、このような基準を作成する必要性を感じ、教育研究財団（NFER）に特別支援学校や公立学校の教員と協議して基準を開発することを委託した。そして1998年にP scalesの初版が発行された³⁾。

P scalesは1998年当初、学校がSENのある子どもたちの英語、数学、PSD（Personal and Social Development）における目標を設定する際に使用するものとして開発されたが、その後5回の改訂を経て現在の形になっている。

P scalesの構成の変遷をTable 1に示した。P scalesが最も大きく変化したのは2007年である。それまでP scalesを必要とする子どもたちのために、NCのレベル1～3を細分化したり、P scalesとNCとは異なる教科を使用していたりした。しかし2007年からは、P scalesとNCの教科は揃えられ、連続性のあるものとなった。

1998年の初版では、英語（Language and literacy）、数学、PSDにおけるP1～P8を設定し、NCのレベル1・2を1C、1B、1A、2C、2B、2Aに分けて表示した。P1～P3を「発達の初期段階」（early development）として説明し、Table 1においてABCで示しているように、英語、数学、PSDの3つの教科で共通の内容となっている。PSDはNCに設定されていない教科であるため、PSDのレベルはP1～2Aの段階を用いずにレベル1～15で示されている。

2001年に発行された*Supporting the target setting process: Guidance for effective target setting for pupils with SEN* (DfES-2001)により、最初のP scalesの改訂が行われた。これによりP1～P3は(i)と(ii)にさらに細く分けられ、common performance descrip-

tions with subject specific examplesとした。この内容は2015年現在まで変更が行われていない。教科としては、PSDが削除され、理科が加えられた。さらに、NCのレベル3は削除されている。そして理科のみ1C、1B、1A、2C、2B、2Aという細かなレベル分けがなく、レベル1、レベル2と設定されている。

2004年には、P scalesの目的が目標設定のためではなく、評価の基準として使用することに変更され、日々の学習における子どもたちの成長を評価したり、1年の終わりやキーステージの終わりに報告したりする際に用いられるものとなった。教科としては英語、数学、理科の他にICTが加えられ、さらに英語の項目が変更された。NCのレベル2は削除されている。その後QCA (Qualifications and Curriculum Authority) は、学校がP scalesを扱えるようにするため2005年にUsing the P scalesというDVDと冊子を出版した。この資料は、通常学校・特別支援学校の教員や食事補助の職員、特別支援教育コーディネーター、評価コーディネーター、校長に向けて作成されている。2005年には多くの学校が、NCのレベル1に達していない子どもたちに対してP scalesを用いるようになった。現在ではP scalesを用いて評価をすることが法的に義務付けられている。

2007年にQCAが*Performance-P level-attainment targets*を作成したことにより、NCの全ての教科を網羅したP scalesが完成することとなった。2007年から学校は、SENがありNCのレベル1に達していない子どもたちのデータ提出を求められている。さらに、これまでP1~P3の説明に出てきた具体例は全て同じ内容が示されていたが、2007年版では、P1 (i)を除いた他の項目で教科ごとの具体例となっている。そして、宗教教育は付録という形で示された。

2009年の改訂に合わせてQCAは*Planning, teaching and assessing the curriculum for pupils with learning difficulties*を作成した。同時にUsing the P scalesも改訂された。2009年版は、2007年版と科目数や項目の細分化は変わらないが、付録として示されていた宗教教育が1つの教科として扱われている。

政府は2014年の7月にP scalesの修正を行った。内容の大きな改訂はないが、ICTがComputingへ、Modern Foreign LanguagesがLanguagesへと変更され、宗教教育は再び付録という形で示されている。なお、Ta-

Table 2 2009年と2014年におけるP scalesの比較

P1 (i) 2009年	Pupils encounter activities and experiences. They may be passive or resistant. They may show simple reflex responses, for example, startling at sudden noises or movements. Any participation is fully prompted.
P1 (i) 2014年	Pupils encounter activities and experiences. ・ They may be passive or resistant. ・ They may show simple reflex responses [for example, startling at sudden noises or movements.] ・ Any participation is fully prompted.

ble 1では、三つの年代のものを同時に掲載したため、教科の順番が実際のものとは前後しているものもある。さらに、内容は全く同じであるものの、それぞれの内容を箇条書きにし、大きな目標1つと複数の下位目標という形で書き直された (Table 2)。このように提示することで、それぞれのレベルで何を最優先に行えば良いのか分かりやすくなった。

3. P scalesの内容

現在、P scalesはP1 (i) ~P8まで11の段階があり、P1 (i) が最も低く、P8が最も高いレベルである。つまり、P8が最もNCに近いレベルということである。

P scalesでは全部で13の科目が示されている。最終的にNCにつながるように設定されているため、NCの全ての教科が含まれている。科目数や科目名はほとんどNCと同じものが使用されている。Table 3はP scalesの教科とNCの教科を比較したものである。ただし、P scalesではNCの教科に加えてPersonal, social and health education (以下PSHEとする) が設定されており、Citizenshipと合わせて一つの科目となっている。そして、NCではSex and relationship educationが一つの科目として独立しているが、P scalesにおいてはSex and relationship educationはPSHEの中で学習することになっている。

P scalesにおいて、英語・数学のみ内容が細分化されているが、NCでは英語・数学・理科において内容が細分化され、その上、P scalesよりも細かく分化されており、その数は多い。学年によってその数がことなるため、ここでは教科名のみを掲載する。

イギリスの教師は、キーステージ1~3のそれぞれの最後の時期に英語、数学、理科の評価を行い、Standards and Testing Agency (STA) へ提出しなければならないため、この際にP scalesを使用する。(STAとはイギリス教育省の行政機関のこと。Early years から

Table 3 P scalesとNCの比較

	P scales	National Curriculum
1	Art and Design	Art and design
2	Computing	Computing
3	Design and Technology	Design and technology
4	English ・ Speaking ・ Listening ・ Reading ・ Writing	English
5		Geography
6	History	History
7	Mathematics ・ Using and applying mathematics ・ Number ・ Shape, space and measures	Mathematics
8	Music	Music
9	Languages	Languages
10	Physical Education	Physical education
11	PSHE and Citizenship	Citizenship
12	Science	Science
13	Religious Education	Religious education
14		Sex and relationship education

キーステージ3までの全てのアセスメントにおける責任を持つ。かつては、Qualifications and Curriculum Development Agency (QCDA) であったが、2012年4月にSTAとなった。)さらに、面談などの時に保護者へアセスメントの結果を報告する際にも用いられる。

P scalesの使用はSENのある子どもだけに限られる。NCのレベル1未満の到達度であっても、SENのない子どもは、「NOTSEN」として評価が行われる。SENがないと判断される場合は主に、知的な遅れはないが英語を第一言語としない子どもたちである。

QCDAはフローチャートを用意し、どのような時にP scalesを用いることができるか説明している。Figure 1はこのフローチャートを図示したものである。

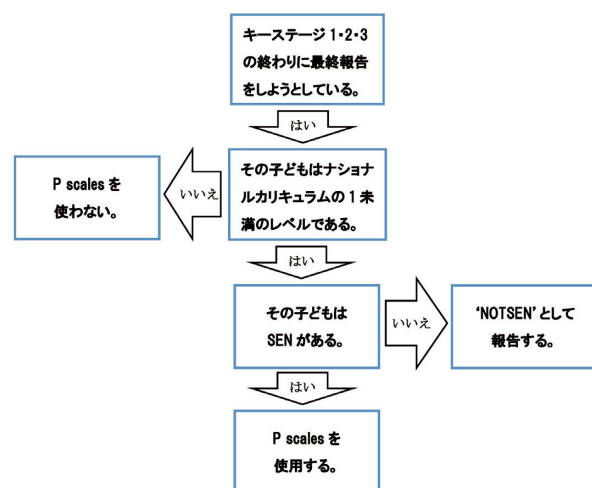


Figure 1 P scalesのフローチャート

ではここで、この図を詳しく見ていく。まずは、キーステージ1～3の最後の時期であり、報告が必要であるのかが問われている。そこで「はい」へ進むと、次は評価しようとしている子どもが、NCのレベル1に到達していないのかが問われる。ここで、子どもがレベル1に到達しているのであれば、P scalesを使用せずに、NCで評価をしなければならない。しかし、レベル1に到達していないのであれば、次の項目に進むことになる。次に問われるのは、子どもにSENがあるかである。ここで子どもにSENがないのであれば、先ほども述べたように「NOTSEN」として報告される。しかし、SENがあるのであれば、P scalesを用いて評価を行わなければならない。このようにしてP scalesを使用するまでの流れができていく。

では、さらに具体的にP scalesの内容を見ていくことにする。ここからは2014年版のP scalesを使用して説明していく。

各教科のレベルはそれぞれP1～P8の8段階で設定されているが、全教科においてP1～P3はすべて同じ内容が設定されている。ただし、具体例は各教科で異なっている。具体例とは、P scalesのそれぞれのレベルの説明に出てくる、「例えば～」で始まる一文のことである。Table 4に英語のP1～P3の例を示す。P1 (i) の文は、どの教科においても全く同じ内容であった。P1 (ii) の例文を見ると、英語では「親しみのある人とのやりとり」に少しだけ注意を向ける。「社交的な活動に、時々喜んで参加する。」という例が挙げられているが、数学では、「手の中に置かれたときに、短い間ものをつかむことができる。」「出来事やものが突然現れたりなくなったりすると時々驚きを示す。」、理科では「光が光った方を見たり、大きな音がした方に顔を向けたりする。」「温度が変わったものから手を引っ込める。」という例が挙げられている。

なお、イギリスでは、通常の学校の中でSENのある子どもに対する支援として、段階的な教育的な手立てを用意するスクールアクション (School Action)、スクールアクションプラス (School Action Plus) がある。

スクールアクションは、SENがあると認められた子どもに対して行う支援の1番目の段階である。子どもの特別な教育的ニーズは少なく、多くは校内のリソースの工夫によって支援を行う段階である。個別教育計画を作成した上で、授業の工夫や配置されている補助

Table 4 P1～P3の日本語訳（英語の場合）

レベル	内容
P1(i)	子どもたちは様々な活動や経験に出会う。子どもたちは受け身的であったり、あるいは抵抗したりするかもしれない。子どもたちは、突然の大きな音や動きにびっくりするといった単純な反射反応を示す。子どもたちは、どの活動においても完全な支援を必要とする。
P1(ii)	子どもたちは活動や経験に対して新たに気づくようになる。ある人物や活動、物、物の一部に注意深くなったり、注意を向けようとする時にある程度の期間行うことができる。例えば、親しみのある人とのやりとりで少しだけ注意を向けるなど。社交的な活動に、時々喜んで参加するなど、断続的な反応を示すかもしれない。
P2(i)	子どもたちは常に、親しい人や活動、物に反応を示すようになる。新しい活動や経験にも反応するようになる。例えば、注意を向けられないなど。子どもたちは、人、活動、物に興味を示し始める。例えば、親しい人には笑顔を見せるなど。子どもたちは、共同作業をすることを受け入れたり従ったりする。例えば、関わり手が示したように物語や詩の感覚的な部分に注意を向けるなど。
P2(ii)	子どもたちはやりとりの中で先を予想し始めるようになる。子どもたちは一貫した好みや感情的な反応によってコミュニケーションを行う。例えば、気に入った人に手を伸ばすなど。子どもたちは親しい人や活動、物を認識する。例えば、気に入った人に対して特定の方法で声を出したり、動きを見せたりするなど。子どもたちは、試したり試行錯誤しながら動きを見せ、短期間の間、学習したことを覚えている。例えば、感覚的なものを使用して劇化された詩に、特定の人形が出てくる度に喜ぶなど。子どもたちは探索したり、支援を受けながら参加したりすることを共同的に行うようになる。例えば、親しい人と交互にやりとりをしたり、表情や動きを真似したりするなど。
P3(i)	子どもたちは意図的なコミュニケーションをし始める。目を合わせること、身振り、動きで注意を引くようになる。子どもたちはあるできごとや活動を求めるようになる。例えば、重要なものや人を指したりするなど。子どもたちは、以前よりすくなく支援で活動に参加する。子どもたちは短い間、集中力を持続させることができる。徐々に複雑な方法でものを探そうようになる。例えば、あるできごとのきっかけとなる触覚刺激のあるものに手を伸ばしたり、感じたりするなど。子どもたちは、自身の活動の結果に興味を持って観察する。例えば、自分自身の声を聴くなど。子どもたちは、さらに長い期間に渡って学習したことを覚えている。例えば、決まりきった日常動作を順番通りに行ったり、適切な反応をするなど。
P3(ii)	子どもたちは、新たに決まりきったコミュニケーションを行う。知っている人に挨拶をしたり、やりとりや活動を新たに始めたりする。例えば、他の人をやりとりの中に参加させてみるなど。子どもたちは、長い期間でも学習した反応を覚えているようになり、知っていることは予想するようになる。例えば、親しみのある詩の中で代替の音や動きを使うなど。子どもたちは、動きや身振りを付け加えたり、選んだりする。例えば、頷く、握手をするなど。子どもたちは、より長い期間、積極的にものや活動を探索するようになる。例えば、他の人と一緒に本のページをめくするなど。子どもたちは、体系的に問題を解決する能力がある。例えば、新しい活動を要求するために大人に何かそれを示すものを持ってくるなど。

教員が積極的に関わることで支援を行う。

スクールアクションプラスは、スクールアクション段階での支援ではカリキュラムにアクセスすることが難しい子どもに対して行う支援の段階である。スクールアクションプラスでは、地方当局が学校に対して資金の提供を行い教材の工夫を行ったり、新たに補助教員を配置したり、地方当局から派遣された専門的な教員（巡回教員）を活用した個別の指導などを行ったりするなどスクールアクションよりも手厚い支援が行われる。

4. Mapledown Schoolの実践

実際にP scalesがどのように使用されていたのか、詳しく紹介する前に、出井がボランティアスタッフとして実際に参加・観察を行ってきたイギリスの特別支援学校について紹介する。

Mapledown Schoolはロンドンのバーネットにある、様々な障害を抱えた子どもたちのための中等学校である。

学校には校長1名、副校長2名が配置され、当時、キーステージ3・4の生徒を中心に11～19歳の65人の生徒が全部で10のクラスに分かれていた。クラス編成をTable 5に示した。それぞれのクラスには教員免許を持つ教師1人と、教員免許のないLSA (Learning Support Assistant) と呼ばれるスタッフが3～6人配置されていた。LSAの多くは心理学などを学んでいた。それぞれの教室は障害種別に設けられた3つのLearning Zone (LZ) に分かれて設置され、LZ1は、主に知的障害 (Severe Learning Disabilities (以下SLDとする)) の生徒を中心に2クラス、LZ2は自閉症 (Autistic Spectrum Continuum (以下ASCとする)) の生徒を中心に4クラス、LZ3は重度・重複障害 (Profound and Multiple Learning Disabilities (以下PMLDとする)) の生徒を中心に4クラスで編成されている⁴⁾。

Table 5 Mapledown Schoolのクラス編成

ZONE	CLASS	STAFF			計	備考
		Teacher	Lead LSA	LSA		
LZ1 (SLD)	Class 1	1	3	3	7	Lead LSAの1人は週3日勤務 LSAの1人は週2日勤務
	Class 2	1	2	2	5	
LZ2 (ASC)	Class 4	1	1	4	6	
	Class 5	1	1	4	6	
	Class 6	1	1	3	5	
LZ3 (PMLD)	Class 7	1	1	2	4	
	Class 3	1	1	5	7	LSAの2人は週3日勤務
	Class 8	1	1	3	5	
	Class 9	1	1	2	4	
	Class 10	1	1	4	6	
	計	10	13	32	55	

出井は、滞在期間中の最後の3か月間である、2014年1月7日～2014年4月4日の間Class 1に配属された。ここには、14歳から18歳までの男子4名、女子3名、計7名が在籍しており、主にSLDの生徒のクラスである。

Mapledown Schoolでは大きく分けて、総括的アセスメント (Summative Assessment) と形成的アセスメント (Formative Assessment) の2種類のアセスメントを実施している。例をTable 6に示す⁵⁾。

以上のアセスメントの中から、ここではP scalesの使用に関連するものとして、①年間評価、②P scalesを

Table 6 総合的・形成的アセスメント

総合的アセスメント	
1	・年間評価(Annual Reviews)
2	・P scalesを用いた基準と目標の設定 (Baselines & Target Setting using 'P Scales Framework for Assessment')
3	・個別の学習目標と評価(Key Personal Learning Targets & evaluations)
4	・年間報告(Annual Reports)
5	・食事指導(Lunchtime Programmes)
6	・アスダン(ASDAN Schemes)
形成的アセスメント	
1	・子どもたちの評価に関連した教室における観察ややりとり (Classroom observations/interactions that indicate pupil attainment)
2	・授業案の評価(Lesson Plan evaluations)
3	・子どもの特性(Pupil Profiles)

用いた基準と目標の設定、③個別の学習目標と評価、④年間報告、⑤授業案の評価、の5つを取り上げて詳しく説明していく。

4-1. 年間評価

教師は毎年6月末に地方当局とSTAに子どもたちの評価のデータを送らなければならない。この時に、通常学校の教師はNCにおける評価を送るが、特別支援学校の教師はP scalesを用いた評価を送る。しかしP scalesは、先にも述べたように、子どもたちの到達目標や期待されるスキルが書かれているものであり、とても概念的である。そこで、Mapledown Schoolでは、P scalesのそれぞれの説明に対して、「The Framework for Recognising Attainment」(QCA 2001)をもとにして下位項目を設定していた。これはMapledown School全体で共通するもので、どの教師も同じものを使用して子どもたちを評価していた。

では、実際に図を使って説明していく。Figure 2は、実際にMapledown Schoolの教師が生徒XのP1 (i) 「Encounter (出会う)」を評価する際に用いた書式であり、パソコン上で入力する。下部の四角の中に示さ

れているのは、P scalesにおけるP1 (i) 「Encounter (出会う)」の説明である。

P1 (i) ~P3 (ii) には「Encounter (出会う)」のような表札がそれぞれ付けられている。P1 (ii) は「Awareness (気づき)」であり、何かが行われていることに気づくことや、ものやできごと、場所にすばやく焦点を当てることだとされている。P2 (i) は「Attention and Response (注意と反応)」で、驚きや喜び、不満を表すことである。P2 (ii) は「Engagement (従事)」で注意を向ける方向を指示されることや、見たり聞いたりするものを示されることに従事し、興味や気づきを示したり思い出したりすることである。P3 (i) は「Participation (参加)」であり、共有すること、順番を守ること、予測すること、支援を受けて参加することが含まれる。P3 (ii) は「Involvement (関わり)」となり、積極的な参加、手を伸ばす、協力する、意見を述べることである。

これをもとに、Mapledown Schoolでは下位項目を設定しており、P1 (i) では4つの下位項目が設定されている。図中、年月が表示されているセルは実際は緑色、空白の部分は赤色で表示されている。当初はすべて赤の表示である。下位項目一つ一つについて達成することができたかを判断し、達成された場合、年月を記入する。年月の記入後は赤の表示部分が緑色に変わるようにプログラムされている。図は項目1「単純な反射反応を見せる。」が2014年12月に、項目3「付随的に音を出すことができる」が2014年8月に、項目2「十分な誘導の下で活動に参加することができる」が2015年9月に達成されたこと、項目4「相互行為の可能性はある」はまだ達成されていないことを示している。

年号の下に示されている%は、このレベル全体の到達度を示し、下位項目総数に対する達成した下位項目

内容	年							
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	
	50%	75%	0%	0%	0%	0%	0%	
1 単純な反射反応を見せる。例: 突然の音や動きに驚く。	Dec-14	Dec-14						
2 十分な誘導の下で活動に参加することができる。		Sep-15						
3 付随的に音を出すことができる。	Aug-14	Aug-14						
4 相互行為の可能性はある。								

P1(i) 出会う
 子どもたちは様々な活動や体験に出会う。子どもたちは受け身的であったり、あるいは抵抗したりするかもしれない。子どもたちは単純な反射反応を示す。どの活動においても、完全な支援を必要とする。

Figure 2 生徒XのP (i)

Table 7 Mapledown SchoolにおけるP scalesの下位項目数

Subject		P1 (i)	P1 (ii)	P2 (i)	P2 (ii)	P3 (i)	P3 (ii)	P4	P5	P6	P7	P8
English	Speaking	4	27	37	36	38	52	11	14	8	11	7
	Listening							8	6	4	6	7
	Reading							14	9	12	10	12
	Writing							12	15	15	9	9
Mathematics	Using and applying mathematics	4	27	37	36	38	52	8	12	10	15	15
	Number							12	17	25	15	25
	Shape, space and measures							10	21	20	9	15
ICT								13	12	13	15	14
計		4	27	37	36	38	52	88	106	107	90	104
PSHE	Eating and Drinking	2	6	7	8	6	4	8	6	6	5	1
	Personal Presentation	2	3	3	3	2	3	2	2	2	2	2
	Personal Hygiene	2	3	4	5	3	4	4	5	4	1	1
	Personal Safety							1	1	2	2	3
	Independence and Organisational Skills	2	2	3	3	3	4	3	1	4	2	3
	Self Advocacy	2	2	2	3	3	3	4	1	3	6	5
	Mobility	3	2	3	2	2	2	2	1	3	2	2
Relationships and Sex Education	2	4	3	2	2	4	3	4	4	5	10	
計		15	22	25	26	21	24	27	21	28	25	27

の比率が表示される。たとえば、生徒Xは2014年に4項目の2項目が達成されたため、P1 (i) の到達度は50%ということになる。この到達度が80%以上になると次のレベルへと進む (P1 (i) の下位項目は4つしかないため、4分の3以上で次のレベルに進む) ことができる。生徒Xは、2015年の9月に項目2を達成し、P1 (i) の到達度が75%になったため、次のレベルに進むことになる。このように生徒一人ひとりに記録されるP scalesは、達成されるたびに追加されているため、P1 (i) からその後の記録が全て残されている。

この下位項目は学校が必ず設定しなければならないものではない。このため学校によっては、下位項目を設定せずに子どもたちの到達度をはかっている場合もある。

Mapledown Schoolでは、英語・数学・ICT・PSHEの4つに対してP scalesの独自の項目を用意している。Table 7にあるように、英語・数学・ICTのP1～P3の下位項目は共通であるが、PSHEは、P1～P8まで独立した項目が設定されている。PSHEではP1 (i) から下位項目を食べる・飲む (Eating and Drinking)、自己表現 (Personal Presentation)、自己衛生 (Personal Hygiene)、身辺処理と片づけの技能 (Independence and Organisational Skills)、自己主張 (Self Advocacy)、動き (Mobility)、相互関係・性教育 (Relationships and Sex Education) の7つの分野に分けており、P4以降はPersonal Safetyを加えた8つに分けている。

P4～P8は英語・数学・ICTにおいても教科ごとに下位項目が設定されている。さらに、P4以降になると英語は話す、聞く、読む、書く、の4つに、数学は、数

学の生活への利用 (Using and applying mathematics)、数 (Number)、形・空間・長さ (Shape, space and measures) の3つに細かく分けられている。

PSHEでも、先で説明した、英語・数学・ICTにおけるP1 (i) と同じP scalesの説明が使用されているが、その下位項目の内容は日本の知的障害特別支援学校の生活科に近い内容になっている。PSHEでは15の下位項目が設定されており、それぞれの分野に2～3個の下位項目がある。

P1 (i) ～P3 (ii) の項目数を比較すると、英語・数学・ICTの項目数よりもPSHEの項目数の方が多い。合計数だけを見るとP1 (ii) 以降は英語・数学・ICTの方が多いように見えるが、これは3科目を合わせた数であるので、それぞれの項目数を3で割るとP1 (ii) は1科目あたり9項目、P2 (i) は約12項目、P2 (ii) は12項目、P3 (i) は約12項目、P3 (ii) は約17項目ということになる。このようにPSHEの項目数が多くなっているのは、PSHEは生活に近く、食事や生活習慣など、その内容が多岐にわたるということが理由の一つとして考えられる。

4-2. P scalesを用いた基準と目標の設定

ここではキースキルズ (Key skills) という活動を用いて説明していく。

Key skillsとは、生徒の実態に合わせて担任が設定するもので、その生徒にとって現在、最も重要な技能は何かを判断して設定される。Key skillsの時間は毎日設定されており、その記録も毎日残されていた。

Class 1においては、Key skillsは教室内で、生徒とス

スタッフが1対1になって行われていた。生徒一人ひとりに4つの課題が用意されており、課題はそれぞれの箱に入れられている。Key skillsの時間になるとスタッフが担当の生徒の箱を持っていく。担当のスタッフはその場で課題に対する記録を行う。Key skillsを行う度に、毎回必ず記録が行われる。

Table 8が、生徒JのKey skillsの項目である。P scalesに基づく項目が3つ、独自の項目が1つある。それぞれの課題に対して1つずつ項目が設定されている。

Table 8 生徒Jのキースキルズ

Student J's Key Skills
<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃのブロックを正しく使う。5個以上のブロックを使ってタワーをつくる。(P3ii) ・ボタンを押すなどして、スイッチ教材を正しく使う。 ・本のページをめくる。(P3i)他の人と本を共有したり一緒に読んだりする。(P3ii) ・マーカーペンを使って紙に異なる模様を描く。(色を塗る／選択肢を与える) (P3ii)

項目の最後に括弧の中で示されているのがP scalesのレベルである。生徒JはP scalesの3 (i) レベルであるため、課題のレベルは3 (i) ～3 (ii) に設定されている。これらのP scalesのレベルはMapledown Schoolが用意しているP scalesの下位項目の中から決められている。このように、Key skillsはP scalesのレベルと関連させながら設定されていた。

さらに、生徒Jと一緒に活動をしたスタッフはそれぞれの課題に対して、その場で一言ずつコメントを残していく。記録の中には、どの程度の支援をしたら生徒Jが課題に取り組むことができたのか、課題に集中することができたか、生徒の力だけで課題を達成することができた、といったことが記されていた。

4-3. 個別の学習目標と評価

個別の学習目標はその頭文字を取ってKPLT (Key Personal Learning Target, 以下KPLTとする。) と呼ばれているが、これはMapledown School特有の呼び方であって、全国共通のものではない。しかし、どの学校でも個別の学習目標を設定しているため、例えば他の学校ではKLT (Key Learning Target) と呼ばれているなど大きな違いはない。

子どもたちがMapledown Schoolに来て間もない場合は、始めの半学期をKPLT作成のための評価期間に充てる。KPLTは①コミュニケーション/ICT、②知識と環境の把握、③体育/運動機能、④個別の日常生活と健康の教育の4つの領域で構成されている。さらに、必要がある場合のみ、これらの領域に加えて創造的な発達という領域が付け足される場合がある。

毎年3月の下旬から4月の中旬にかけて保護者と校長、担任による面談があり、その時に、これまでのKPLTにおける成果を報告するだけでなく、今後のKPLTをどのように設定するかを保護者の意見を取り入れながら話し合われる。つまり、このKPLTは保護者の意向に沿ったものでなければならないため、担任の独断だけでは決められないのである。

では、具体的にKPLTがどのように設定されているのか紹介する。Table 9は、Class1に在籍していた生徒Jの実際のKPLTである。

先に述べたように、4つのテーマに沿って目標が決められている。これは、教室に掲示してあり、どのスタッフにも必ず目に入るようになっている。

Table 9 生徒JのKPLT

Student J's KPLTs
<p><u>コミュニケーション (Communication)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●ベクスの第2段階を使用する。 ●行動のきっかけとなるものを見せた時に適切に反応し、(おむつを見せたらトイレに行く、お皿を見せたらホールに向かう。) 校内の適切な場所を歩いていく。
<p><u>知識と理解 (Knowledge and Understanding)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●床に放り投げることせず、机の上のもの (ブロックやレゴ) を箱に入れて片づける。(毎日5つ、最初は身体的な誘導を行う。) ●事務室まで出席簿をしっかりと握って持っていく。
<p><u>個別の日常生活と健康の教育/生活習慣 (PSHE/Behaviour)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●1日1回ずつ人を叩くことを減らす。 ●普段の手洗いを支援者と一緒に行う。 ●着替えを協力的に行う。
<p><u>体育/運動機能 (PE/Mobility)</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ●平均台の上を自身の力で歩く。バランスを取る遊具で片手を支えてもらいながら歩く。(平均台はホールにあるものを、遊具は校庭の丘の上にあるものを使用する。) ●ボール遊びに参加する。(的に向かって投げたり、ボールをキャッチしたりする。) ●毎日20分間ジムを使う。

それぞれの項目数は生徒によって違っており、いくつずつ設定しなければならないといった決まりはないが、全部の項目数は1人の生徒当たり10項目前後である。

このKPLTは、それぞれの学期を前半と後半に分け、半学期ごとに記録されている。Mapledown Schoolでは、半学期ごとに記録を残すための書式が用意されている。これを見れば現在の学期のいつ、どの項目が達成されたのか、あるいは、達成されていない項目はどのような状況なのかということが分かる。達成された項目は半学期ごとに書き直されていく。教師の評価以外に、その評価がいつ行われたのかを示す日付とともに「Achieved」（達成された）と記される。

4-4. 年間報告

3月になると、保護者との面談に向けて教師は年間報告（Annual report）を作成する。これは日本の通知表にあたるもので、生徒の成長の全ての記録はこの年間報告に記録される。保護者はこの年間報告について校長に直接尋ねることができ、学校はこの記録に関していつでも情報開示できるようにしている。

この報告は、毎年それぞれの生徒に対して1部ずつ教師が作成するもので、1つの報告書の総ページはA4で10ページほどになる。内容は①Introduction、②P scales、③Progress Overviewの3点で構成されており、③のOverviewでは、KPLTの項目がどの程度達成されたのか3段階で評価をし、iコミュニケーション、ii PSD、iii 知識・理解、iv 創造的な発達、v 身体的発達の5つの領域ごとに、どのような活動をして、どのような様子だったのかということが説明されている。

まず、①のイントロダクションでは、スタッフや他の生徒の紹介や、この1年間Class 1でどのように過ごしてきたかといったことが書かれている。

次に、②のP scalesでは、いくつの段階があつてどのように使用されているのかといったP scalesの簡単な紹介の後に、その生徒がP scalesのどれくらいのレベルにあるのか説明されている。

最後に③のOverviewでは、まずKPLTの項目がどれくらい達成されたのか3段階で評価している。1は十分にできている、あるいはそれを上回っている場合、2は進展中、あるいは部分的にできている場合、3は適当でない場合を示している。次に、KPLTの領域ごと

Table 10 年間報告における領域別の評価

学習領域：コミュニケーションとICT	
年間報告における個別の学習目標(2013)	KPLTがどうであったか：- 1 十分にできている、上回っている 2 進展中、部分的にできている 3 適当でない
- 食べ物や欲しいものを要求する際に、一貫して3～4つの異なるシンボルを使用する	1 十分にできている
- オブジェクトオブリアレンスを認識し、正しく反応する(おむつトイレに行く、おぼんご飯の準備)	1 十分にできている
- iPadやホワイトボードを使用し、正しい絵に触れることで2つのビデオや歌の中から好きな方を選択する	1 十分にできている
KPLTに関する様子： 生徒Eは十分に目標を達成することができました。生徒Eはボックスの第1と第2段階を達成し、現在はスナックの時間に第3のa段階を使用しています。 (以下省略)	
一般的な様子： 生徒Eは、欲しいものに支援者の手を持っていたり、支援者を連れていたりすることでコミュニケーションを取ります。スナックや自由時間の時に、アイコンタクトやボックスを使用します。 (以下省略)	

の説明が行われる。Table 10は生徒EのコミュニケーションとICTの領域における評価である。3段階での評価が示された後、KPLTの項目を達成するまでに、どのような活動をしてどのような様子が見られたのかということが書かれている。さらにその次には、普段の生活に関連したことを紹介している。

4-5. 授業(案)

Mapledown Schoolの教師は、指導案を作成することが義務づけられているわけではないが、Class 1の担任はできるだけ書くようにしていた。指導案では、日付、準備、本時の展開が記述されるのはもちろん、その他に単元と関連のあるP scalesの項目も記述される。さらに、目標を記述する部分では、単元の目標に加え、KPLTに関連した目標、P scalesに関連した目標が示されている。このP scalesに関連した目標は、先に述べたMapledown Schoolが独自に設定している項目を使用している。

そして、最後に評価方法が記述される。まずは教師の授業における2つの観点が示され、次に子どもたちの評価方法が示されている。ここではKPLTとP scalesの点から先に述べた目標が達成されているかを評価し、達成されたP scalesの項目は5-1で述べた年間評価に反映される。

Table 11 指導案に使用されたP scalesの項目

生徒E	<p>P3ii 慣れ親しんだ本の反復された言葉、音、語句を結び付けることができる。</p> <p>P3ii 紙に模様をつくることができる。</p>
生徒C	<p>P3ii 親指と人差し指を使って鉛筆を持つことができる。</p> <p>P4 書きの授業に参加し、適切に模様をつくることができる。</p>
生徒A	<p>P3i 短い音を作ったり、共有したりする際に順番を守ることができる。</p> <p>P3i スイッチを使用して意図的な選択をすることができる。</p>
生徒G	<p>P2ii ものを使って単純な動作を行うことができる。例えば、振る、叩く、打つなど。</p> <p>P2ii 慣れ親しんだものや装置を使用して動きを真似ることができる。</p>
生徒J	<p>P3ii 紙に模様をつくることができる。</p>
生徒L	<p>P3ii 紙に模様をつくることができる。</p>
生徒Z	<p>P3ii 紙に模様をつくることができる。</p>

5. おわりに

これまでP scalesの意義と活用状況について述べてきた。P scalesによってどの子どももNCに位置づけることができるようになり、知的障害児のインクルージョンに関する議論を可能にした。さらに、実際の特別支援学校においてP scalesは目標の設定から評価にいたるまで様々な場面で使用されていた。共通の評価項目があることで教員同士の把握がしやすく、引継ぎが容易である。そのうえP scalesは全国共通でもあるため学校間での生徒の情報交換もしやすいという利点もある。そして、小学校1年生から同じ尺度で評価することができるため、どれだけ成長したのかを確かめやすい。しかしその一方で、生徒の実態を深く考えずにP scalesありきで評価項目を設定してしまったり、P scalesの項目を達成することが目的になってしまうケースもある。

ここではP scalesとNCとの関連を述べてきたが、P scalesとプレスクール (preschool) との関連は明確になっていない。P scalesとプレスクールの関連性を明らかにしていくことが今後の課題である。

註

- 1) ここでのイギリスとはイングランドのことである。
- 2) FrancisNdaji and Peter Tymms,. The P scales ; Assessing the Progress of Children with Special Educa-

tional Needs. WILEY-BLACKWELL. 2009. p.3

- 3) 同上.p.12
- 4) ここでのLearning Disabilityとは、いわゆる「学習障害」ではなく、「学習に困難を持つ」という意味である。
- 5) ASDANとは、学習プログラム等を提供する教育慈善団体であり、mapledown schooledではASDAN作成のプログラムによる学習もとりにれている。

参考文献

- ・河合康, 「イギリス特殊教育に対する「1988年教育改革法」の影響」, 上越大学研究紀要 第10巻 第1号, 1990年, pp.153-167
- ・田中耕二郎, 「イギリスの1981年教育法と就学手続について」, 特殊教育学研究, 24 (3), 1986年, pp.61-66
- ・横尾俊, 「我が国の特別な支援を必要とする子どもの教育的ニーズについての考察—英国の教育制度における『特別な教育的ニーズ』の視点から—」, 国立特別支援教育総合研究所研究紀要第35巻, 2008年, pp.123-126
- ・横尾俊, 渡部愛理, 「イギリスにおけるNCとそれへのアクセスの手だてについて」, 国立特別支援教育総合研究所世界の特別支援教育 (24), 2010年, pp.43-52
- ・Department for Education. The national curriculum in England Framework document. 2013
- ・Department for Education. Performance - P Scale - attainment targets for pupils with special educational needs. 2014
- ・Francis Ndaji and Peter Tymms. The P scales Assessing the Progress of Children with Special Educational Needs. WILEY-BLACKWELL. 2009
- ・NASEN. Using the P scales. <http://www.nasen.org.uk/pscales/> (アクセス日2014年12月21日)
- ・Kent Country Council. P Scale moderation. 005 [https://shareweb.kent.gov.uk/Documents/KELSI/Specialist%20Children%20Services/InInclusi/Inclusion%20and%20Achievement/P%20Scale%20moderation.pdf#search=p+scscal+moderations'](https://shareweb.kent.gov.uk/Documents/KELSI/Specialist%20Children%20Services/InInclusi/Inclusion%20and%20Achievement/P%20Scale%20moderation.pdf#search=p+scscal+moderations)
- ・QCA. Supporting the Target Setting Process ; Guidance for effective target setting for pupils with special educational needs. DfEE. 1998
- ・QCA. Supporting the Target Setting Process (revised March 2001) ; Guidance for effective target setting for pupils with special educational needs. DfEE. 2001
- ・QCA. Examples of pupil performance in English, mathematics and science at levels P4 to P8. 2005
- ・QCA. Performance - P level-attainment targets For pupils with special education needs who are working below level 1 of the national curriculum. 2007
- ・QCA. The P scales Level descriptors P1 to P8. 2009
- ・John Visser, Graham Upton. Special Education In Britain After Warnock. David Fulton Publishers. 1993

(でい ななほ・うらさき げんじ)

